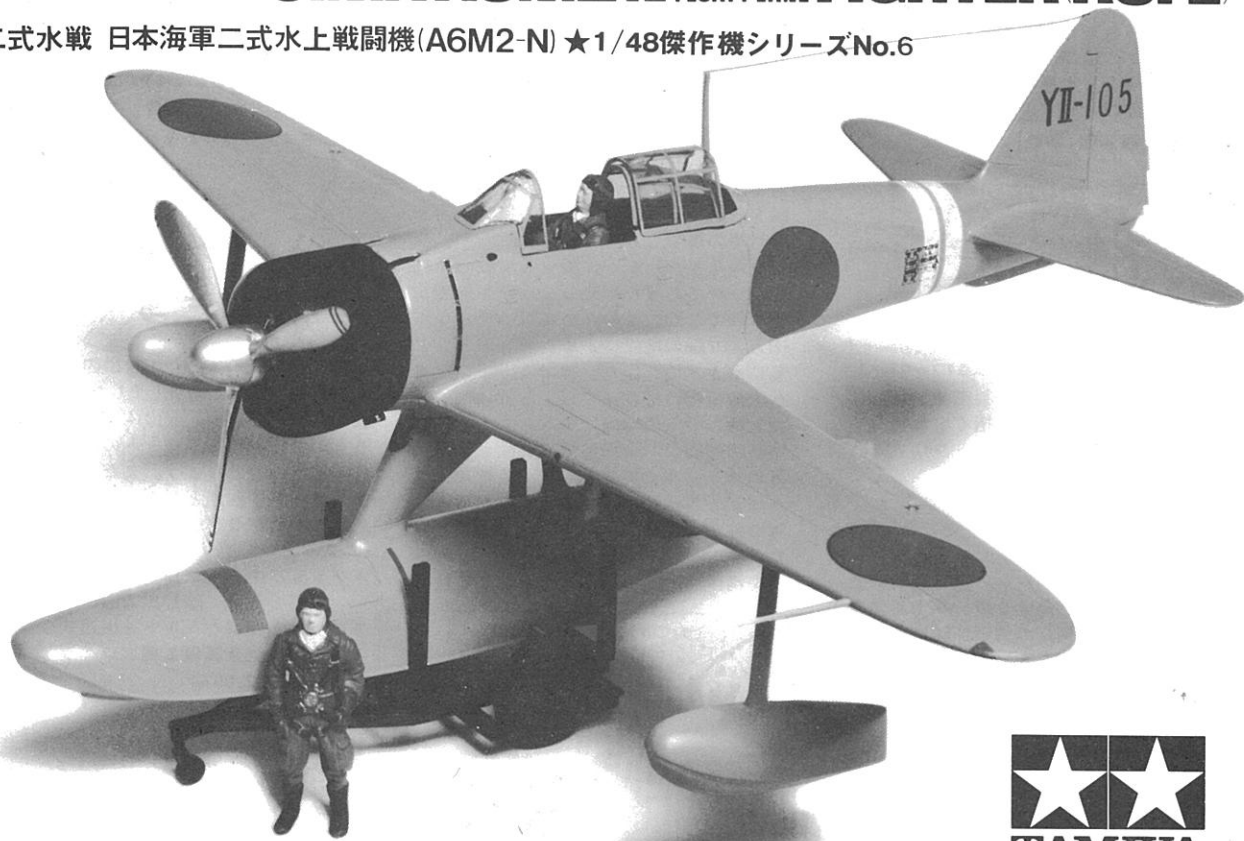


1/48 NAKAJIMA A6M2-N TYPE 2 FIGHTER (RUFÉ) FLOAT PLANE

二式水戦 日本海軍二式水上戦闘機(A6M2-N) ★1/48傑作機シリーズNo.6



完成写真



1/48 SCALE ITEM 61017

二式水上戦闘機の誕生

昭和14年、海軍航空本部内にて、水上戦闘機という、世界にも例を見ない、新機種を試作する案が検討されていました。当時日本海軍は、南方諸地域に上陸進行的な場合を想定して、上陸地に、陸上飛行場基地が造成されるまでの期間、水上機を近くの運河や湾に置き、水上機によって、造成中の飛行場や占領地域の防衛任務に当らせ様と考えました。これには相手側戦闘機とも空戦する事が考えられるため、相手側戦闘機にも劣らない、性能を有する、純然たる戦闘機、水上戦闘機である必要性が生じていました。この構想には、日華事変初期95式水上偵察機で中国側戦闘機と空中戦を行ない、これを撃墜した、陸上戦闘機隊に劣らぬ活躍もあり武装が充分強力ならば、水上機でも互格に戦闘機として空戦できるという確信もあったのです。昭和15年に海軍航空本部は水上戦闘機の試作を決定し、水上機の製作では経験の深い、川西航空機に、15試水上戦闘機(後の水上戦闘機強風)の名称で試作を命じました。一方アメリカ、イギリスなどとの国際関係は、しだいに悪化し、戦争状態に突入する様な様相が日ごとに増してきました。軍の作戦部門では、米、英、国との戦闘は避けられないとの考えからすでに、作戦計画を立案し、南方方面への進攻にとともに、前進基地建設中の防空を受け持つ、水上戦闘機の開発、装備を急ぐ様、航空本部へ催促し、現在製作発注してある所の15試水上戦闘機の実戦部隊装備が3年先の昭和18年では間に合わないとして、応急的にでも15試水上戦闘機とは別に、間に合わせの水上戦闘機の装備を行

なう様、申し込みました。これに対し海軍航空本部は、中国大陸にて、その威力を発揮し優秀機として定評ある、三菱航空機製作の零式艦上戦闘機11型を、水上戦闘機に改造する事とし、この案は昭和16年初めに、採用されました。製作を担当するのは、零戦の量産を分担する、中島飛行機でした。中島飛行機は川西航空機同様、水上機の製作には実績があり、特に単フロート(浮舟)形式の水上機の設計では、三竹忍設計部長が、すでに90式および95式水上偵察機を手がけ、その性能の優秀性は定評のある所でした。中島では、三竹設計部長が担当主任となりこれに田島敦技師ら、若手の設計陣が中心となって、小泉製作所にて、零戦11型零式艦上戦闘機21型(零戦21型)



武装 20mm機関砲 2
7.7mm機銃 2
最大速度 534km/h

を水上戦闘機とする改造作業が昼夜兼行ですすめられ、名称も仮称、一号水戦、(A6M2-N)とされました。改造は試作を急ぐため、中古の零戦11型3機を使い、これを改造し、試作一号機とする方法が取られ、改造部は下記の様になりました。

- ①艦上降着装置の取りはずし及び、主フロート、左右の補助フロート(単フロート形式)の取り付け。
- ②フロート装着により劣化する方向安定と方向舵の効力を補うため、垂直安定

板の取付けと、方向舵面積の増加。

③主翼・胴体などへの侵水及び、耐腐防止対策の実施。

また、主フロートは海軍航空技術廠にて模型実験のすえ決定された形状を採用し計画開始より約1年の短期間にて、昭和16年12月8日、太平洋戦争突入の日、霞ヶ浦の水上基地にて初飛行を行ない、無事成功を納めました。その後横須賀、追浜の水上機隊にて実用試験を重ねたすえ昭和17年7月6日、二式水上戦闘機として、制式に採用され量産に移されました。性能は零戦11型にくらべ、最大速度が534km/hから436km/h、航続距離は2220km(増槽なし)から1778kmと低下しましたが、これは大きなフロートを付けたため、重量と空気抵抗が増したためでした。しかし零戦が備えていた軽快な操縦性は失われておらず、離着水、凌波性能も良好で、太平洋の孤島や建設中の飛行場の防空用としては、時期を得た優秀機として、川西で製作中の15試水上戦闘機が完成するまでの継ぎの水上戦闘機として、20mm機関砲2門と7.7mm機銃2丁の強力な武装を備えた二式水戦は、海軍期待の新鋭機として、日本軍の進撃の目覚ましだった昭和17年中頃より、南洋の孤島や北洋の島々に展開し、水上機というハンディーを負いながらも、連合軍側の大型爆撃機や戦闘機を相手に、奮戦し、おおいに活躍しました。その優秀な性能と機体に対し、アメリカ軍からも、零戦とならび、賞賛されたのです。また最前線に位置するこれらの水上戦闘機部隊は、末期には、そのほとんどが機体とパイロットを失ない、壊滅して華ばない最後を、遂げています。

ソロモン群島の戦闘

連合軍の反撃は、南太平洋、ソロモン群島の端、ガダルカナル島の争奪戦によって始められました。オーストラリアとアメリカとの連絡線上の重要地点、ガダルカナル島を日本軍に占領され、ここに飛行場を建設されては、ニューギニアより

零式水上観測機(零観)



最大速度 370km/h

武装 7.7mm機銃×2・旋回 7.7mm機銃×1

オーストラリア大陸の制空権を奪われ、連合軍は重大な危機を招く事は明白でした。日本海軍は、オーストラリア方面攻略の重要地点である、ラバウル基地より南方1000kmのガダルカナル島に、ルンガ飛行場(米軍名称ヘンダーソン飛行場)とその中間地点ブーゲンビル島にブイン飛行場を造成中で、ルンガ飛行場の防空に対岸のフロリダ島ツラギに水上基地を作り、二式水戦最初の装備部隊である第4航空隊を昭和17年6月中旬より、12機の二式水戦と数機の零式水上観測機(零観)と零式三座水上偵察機(零水偵)でもって当らせていました。飛行場完成が、真近な8月7日、米軍は、ガダルカナル島および、フロリダ島ツラギを攻撃これを、一両日の戦闘で占領しました。これを迎えた第4航空隊の二式水戦12機は、両翼に各一発の3号爆弾(爆弾の中に黄リンで出来た子爆弾が入っており、時限爆弾になっていて、敵機編隊上空で投下

すれば空中で爆発と同時に飛び散り、一度に多数機を墜す事ができる爆弾、重量30kg)を装備し来襲機に対し、編隊上空で3号爆弾を投下、編隊がくずれたり、分散して来る機には、本来の20mm機銃砲と7.7mm機銃にて攻撃を敢行し、連合軍側に多大の損害を与えましたが、8月7日の戦闘で隊員は全員戦死、壊滅してしまいました。日本軍はこれに対し、ラバウルよりガダルカナル島奪回のため陸軍部隊を急送し、海軍機もこれの掩護や占領飛行場の爆撃などを行ないましたが、ラバウルよりの距離が掩護する零戦の航続距離一杯であるため充分な攻撃や掩護が不可能でした。このため海軍はラバウル南方470kmの地点にあるショートランド島に水上基地を作り、神丸以下7隻の水上機母艦の搭載機(二式水戦19機、零観54機、零水偵13機)をもって、第11航空戦隊を編成し米軍占領後完成された飛行場より来襲する連合軍機の攻撃に、またガダルカナル島に輸送する陸軍増援部隊の掩護にと、ラバウルの陸上機隊に代り、ショートランドの美しいリーフの水面を滑走路として17年9月4日より11月

9日まで連日、コロンバンガラ島沖やショートランド上空に、グラマンF4Fなどの戦闘機や爆撃機を迎えうち激しい空中戦を展開、11月7日までの交戦機数150機以上、撃墜確実17機の戦果をあげました。特に10月10日の戦闘では、二式水戦2機(川井・丸山一飛曹)でグラマンF4Fワイルドキャット



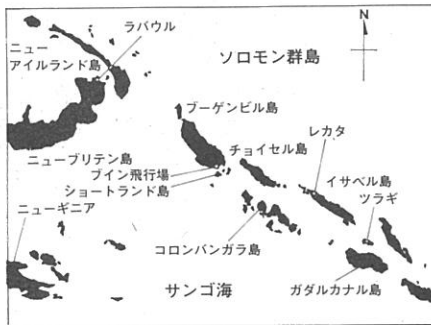
最大速度 515km/h

武装 12.7mm機銃×6

4F20機と空戦し戦死しましたが、よく奮戦し4機を撃墜、内一機は体当たり攻撃によるもので、水戦パイロットの技量と士気を知る良い例でしょう。またイサベル島のレカタを中継地として、ガダルカナル島爆撃や偵察など広く使用されました。

《二式水上戦闘機データ》

エンジン：中島 栄 12型空冷複列星型14気筒 離昇出力940馬力
プロペラ：住友ハミルトン恒速式3D型 全金属製3翼プロペラ
全幅：12.00m
全長：10.131m
全高：4.305m
全備重量：2,460kg(自重1,921kg)
最大速度：436km/h/4,300m
最大航続距離：1778km
武装：胴体7.7mm機銃×2
主翼20mm機銃砲×2
30~60kg爆弾×2
生産機数：327機



《作る前にお読み下さい》

★タミヤからはピン入りの接着剤タミヤセメントが別売されております。モデルをきれいに仕上げるタミヤセメントをお使い下さい。

各部品は組立て順序にしたがって必要な部品をランナー(枝)から、ナイフやニッパーを使い切りはなして下さい。

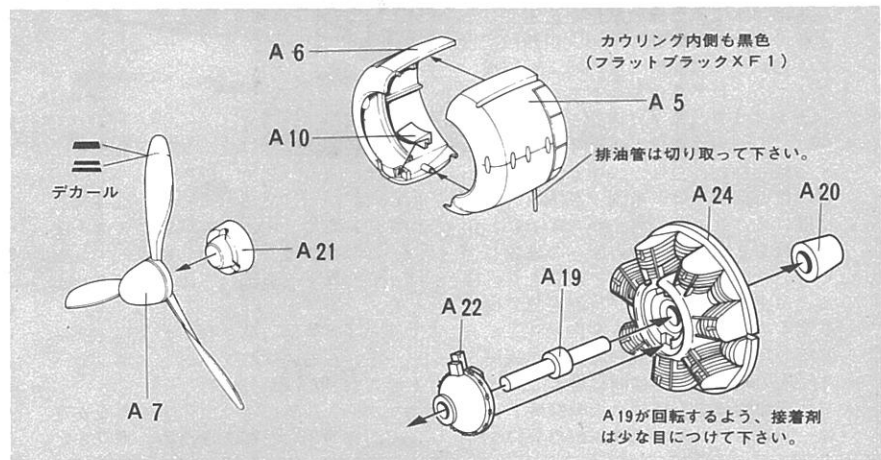
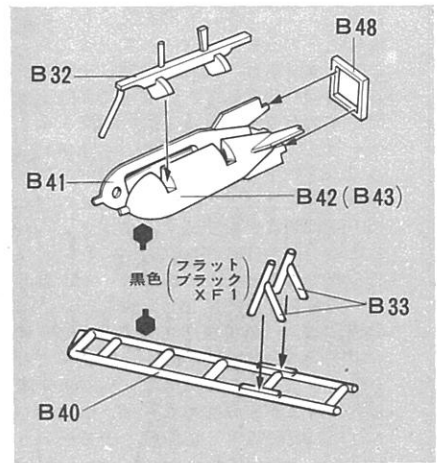
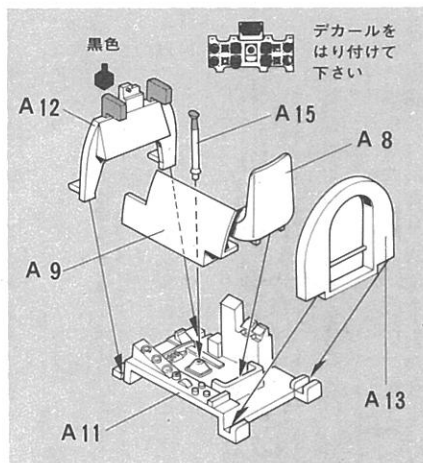
1 座席・爆弾・梯子の組立て

座席の塗装

操縦棒……………クロームシルバー
先端……………フラットブラック
座席……………フラットアルミ
ベルト……………フラットグリーン
座席……………フラットアルミ
座席内部……………メタリックブルー
計器板……………メタリックブルー
銃床……………フラットブラック

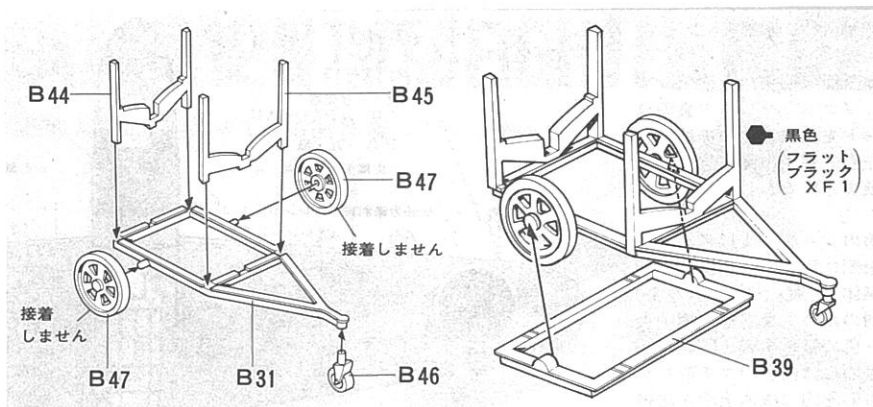
2 プロペラ・カウリング・エンジンの組立て

- プロペラ、カウリング、エンジンを組立ます。合せ目は紙ヤスリ等でていねいに整えて塗装して下さい。
- プロペラシャフト(A19)は回転します。接着剤をつけないように注意して下さい。
- カウリングの排油管は、カウリングを組立てた後、切り取って下さい。
- エンジン細部の塗装は、組立図最後にあります。参考にして下さい。



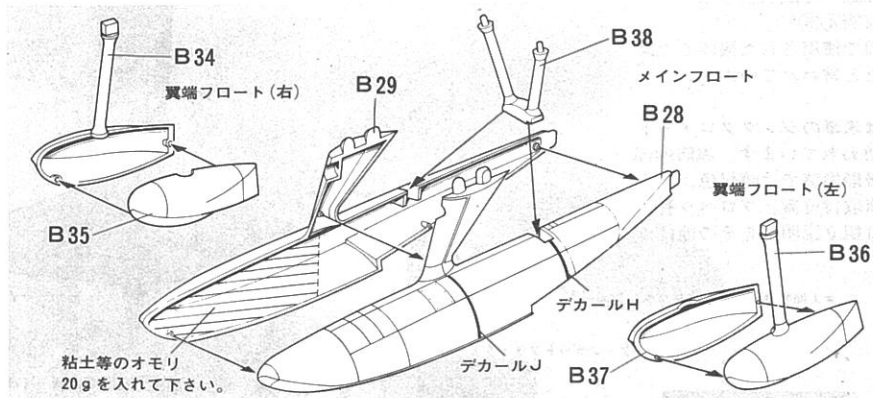
3 台車の組立て

- フロート受(B44)(B45)の前後をまちがえないで組立てて下さい。
- 車輪(B47)は接着しないで、フレームB39で押さえて下さい。



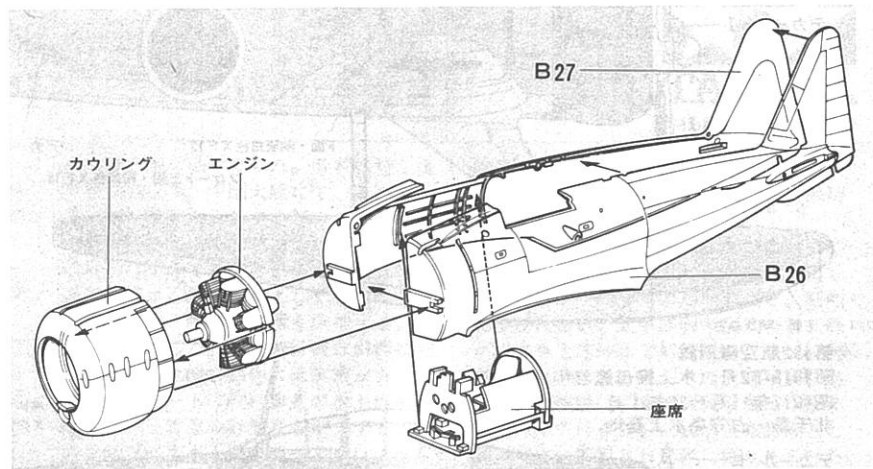
4 フロートの組立て

- メインフロートの前部に、20gの粘土等のオモリを入れて下さい。機体のバランスがとれます。オモリを入れない時は、スタンド(透明部品5)を使用して下さい。
- 翼端フロートには右、左があります。機体正面から見て外側に向かって広がる方向に取付きます。



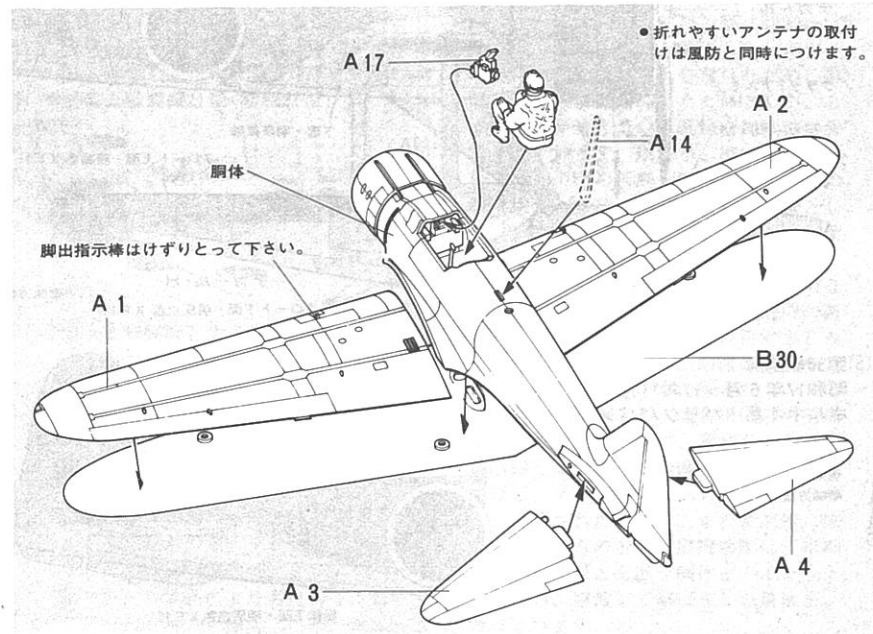
5 胴体の組立て

- 胴体をはり合わせる前に機体内部を塗装して下さい。
- 胴体をはり合せた後に座席を組み入れて下さい。
- エンジンはカウリングに取付けた後に、胴体にとりつけます。



6 翼の組立て

- 主翼と胴体は仮組をして合せ目を調整し、組立てて下さい。
- 人形は、最後までとりつけられます。
- アンテナA14は風防取付と同時に、つけて下さい。



TAMIYA COLOR

タミヤカラー(アクリル塗料)

ぬりやすいアクリル樹脂の塗料です。筆は水洗いもできます。筆塗り、スプレーで美しい仕上がりが楽しめます。NET23cc



TAMIYA CEMENT 40ml

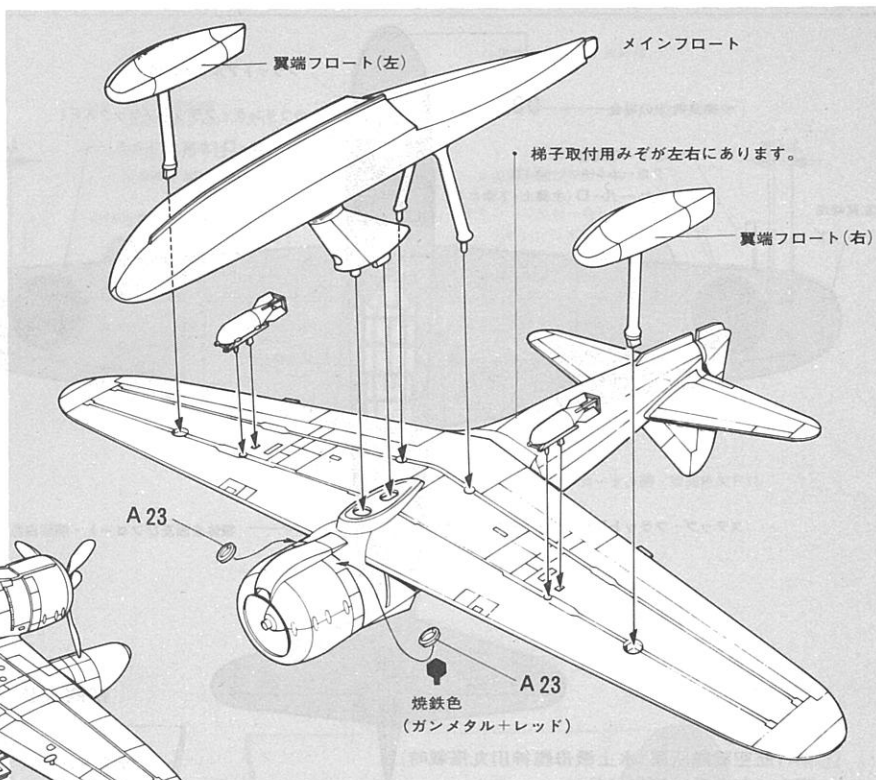
タミヤセメント(ピン入り)

プラスチックモデル用液体接着剤。安定性のいい使い易い四角いピン入り、容量もお徳用です。



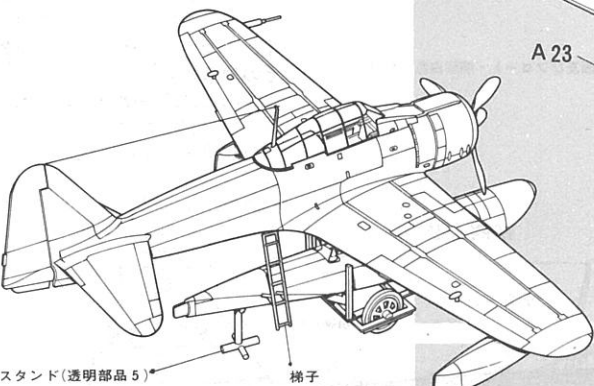
7 フロートの取付け

- メインフロート、翼端フロート、爆弾を取付けます。翼端フロートは、機体前方より見て、外側に広がるよう取付けて下さい。



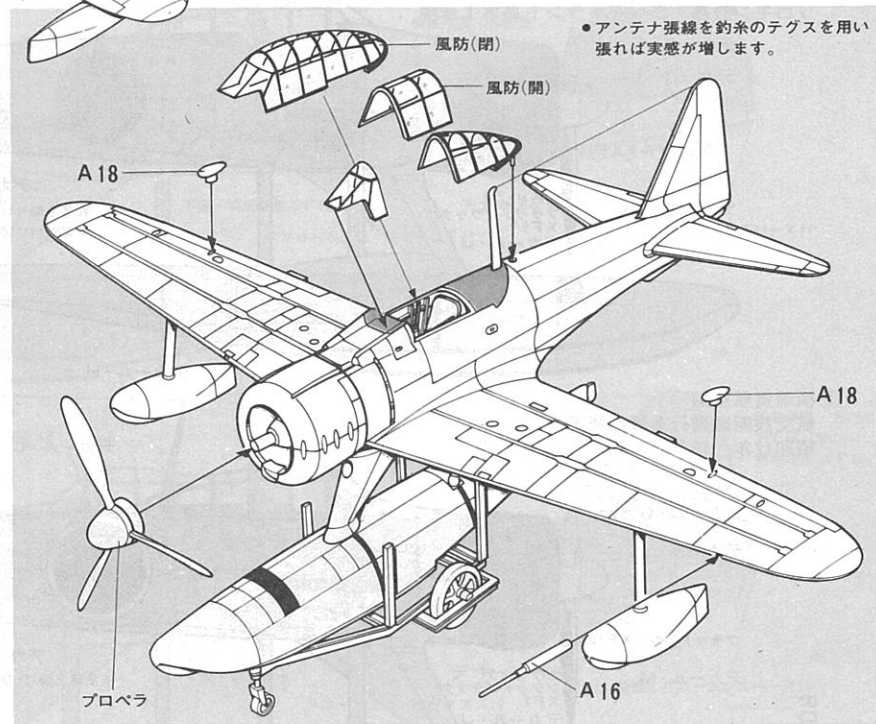
8 梯子・スタンドの取付け

- フロートにおもりを入れない場合は、スタンドを図の位置において下さい。



9 風防のとりつけ、と最終組立て

- 透明部品の接着は、接着剤がはみださないよう、注意して下さい。
- 風防(開)は、開いた状態で取付けてもよいでしょう。
- 立姿の人形は、機の近くに立たせて下さい。

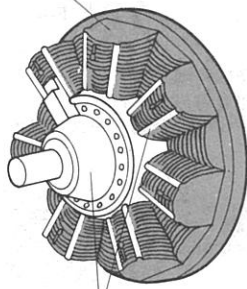


部品表

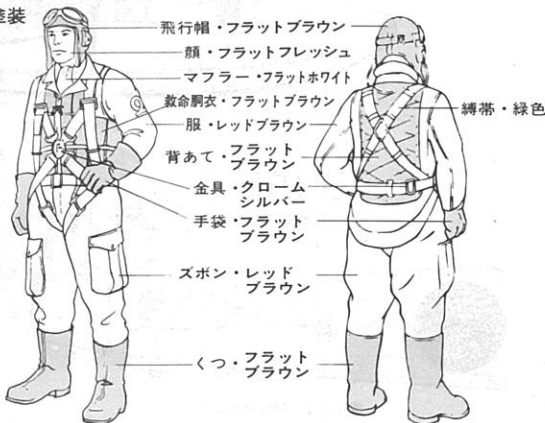
- | | |
|----------------|-------------------|
| A 1. 主翼上部(左) | 13. 背板 |
| 2. 主翼上部(右) | 14. アンテナ柱 |
| 3. 水平尾翼(左) | 15. 操縦棒 |
| 4. 水平尾翼(右) | 16. ビーター管 |
| 5. カウリング(左) | 17. 照準器 |
| 6. カウリング(右) | 18. ヒンジカバー |
| 7. プロペラ | 19. プロペラシャフト |
| 8. 座席 | 20. プロペラシャフトストッパー |
| 9. 側面計器板 | 21. スピナー(後) |
| 10. 氧化器取入口部品 | 22. ギャケース |
| 11. 床板 | 23. 排気管 |
| 12. 計器板 | 24. エンジン |
| B 26. 胴体(左) | 37. 左翼端フロート(内) |
| 27. 胴体(右) | 38. V型支柱 |
| 28. メインフロート(左) | 39. 台車フレームB |
| 29. メインフロート(右) | 40. 乗降ラダー |
| 30. 主翼下部 | 41. 爆弾(A) |
| 31. 台車フレームA | 42. 爆弾(B)左 |
| 32. 爆弾架 | 43. 爆弾(B)右 |
| 33. ラダー支柱 | 44. フロート受(後) |
| 34. 右翼端フロート(外) | 45. フロート受(前) |
| 35. 右翼端フロート(内) | 46. 台車前輪 |
| 36. 左翼端フロート(外) | 47. 台車車輪 |
| | 48. 爆弾(C) |

エンジンの塗装

エンジン全体は黒鉄色
ガンメタルX10



人形の塗装



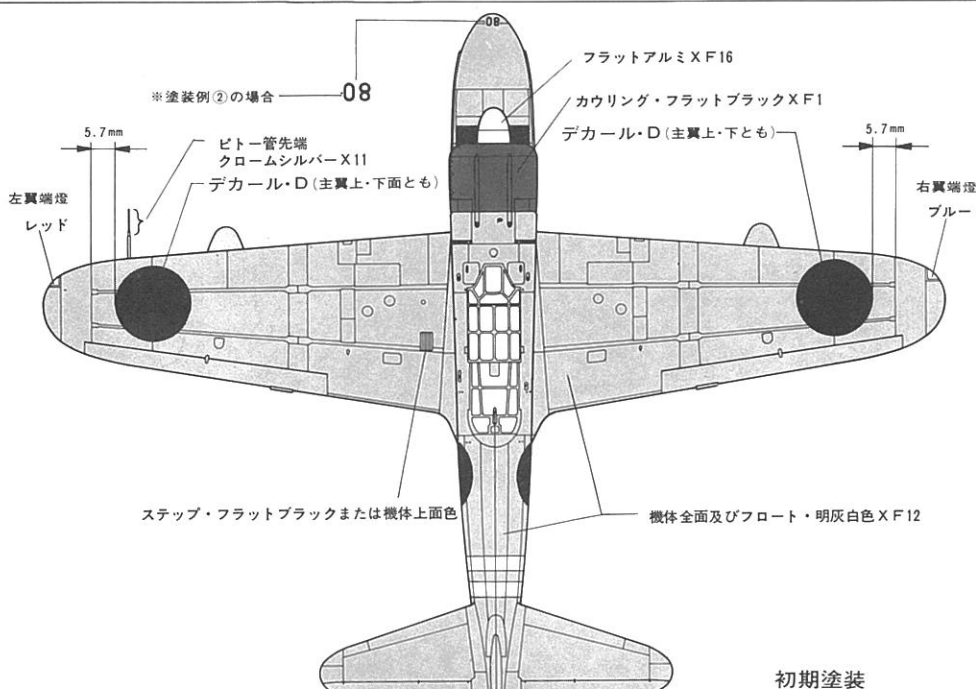
タミヤの総合カタログ

タミヤの全製品を詳しく解説した総合カタログは年に1回発行。ご希望の方は模型店でおたずね下さい。

タミヤニュースを読もう

タミヤニュースはモデル作りの参考誌として多くの方に愛読されています。ご希望の方は模型店でおたずね下さい。当社より定期購読する方法もあります。

田宮模型
静岡市恩田原3-7 〒422



二式水戦の塗装とマーキング 初期塗装

エンジンカウリングは黒色、プロペラブレード及びスピナーは黒色または暗い茶褐色。プロペラマーク“日の丸”は、胴体側面が二式水戦の基本塗装で昭和

後期塗装

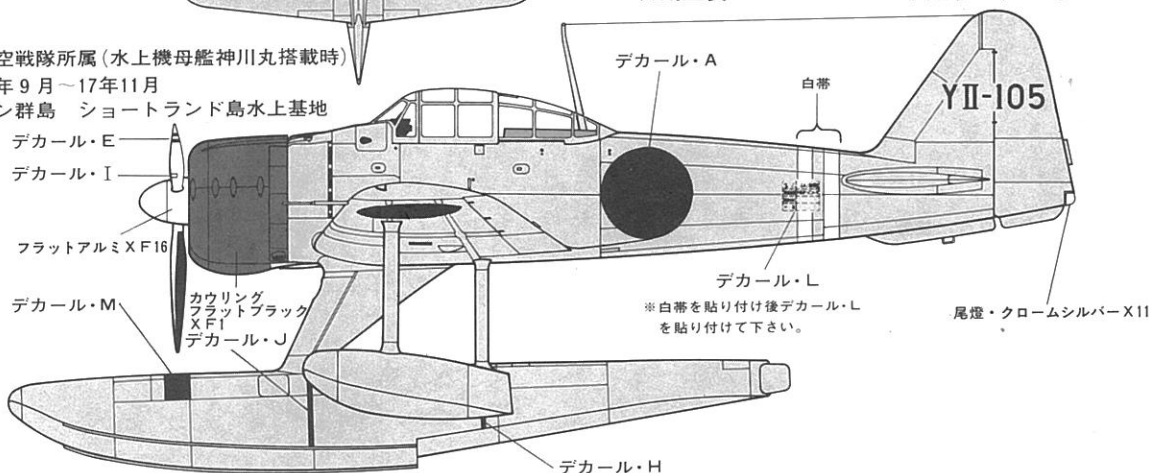
戦線の拡大と激化にともない、使用する機体がジャングルの緑に溶け込むため、1942年7月3日全軍通達にて初期上面を暗緑色に塗装、さらに敵部より付根にかけて、オレンジ色の“日の丸”も胴体側面・主翼に塗装してありましたが、このイエロー色は塗装されていません。また一説では、アリュージョン・藤色下面、暗い灰色とした塗装

その他の塗装

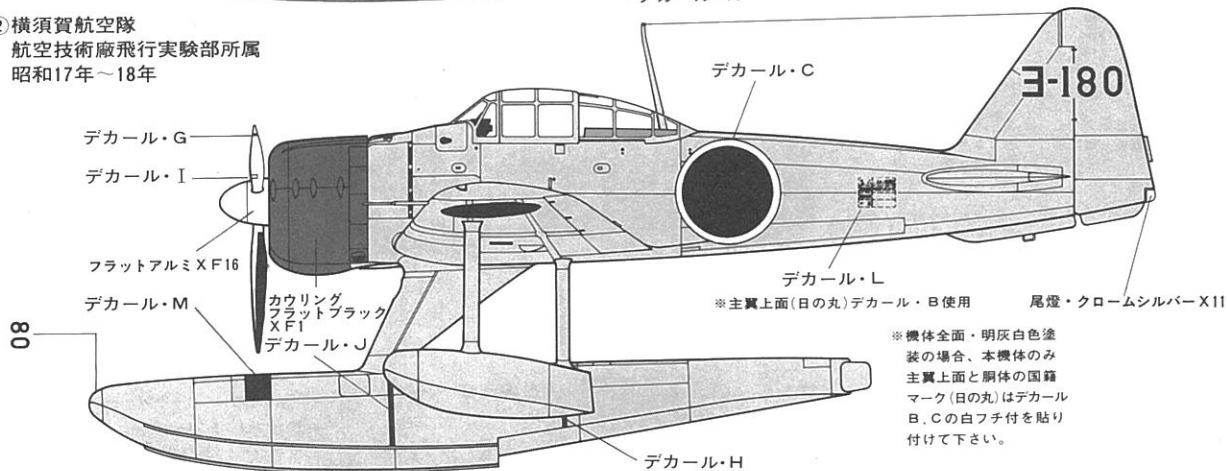
機体内部は透明塗料の青緑色、エンジン色(黄緑色)に近い色を塗っているのは防眩塗装の暗い灰色または黒色です。また主フロートに位置を示す赤帯があります。細部カラー図を参照下さい。

初期塗装

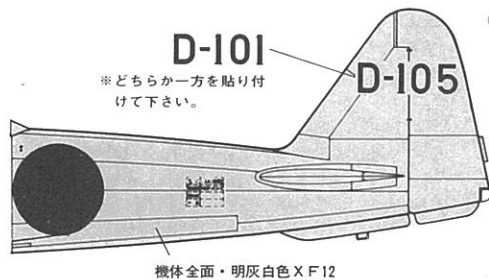
- ① 第11航空戦隊所属 (水上機母艦神川丸搭載時)
昭和17年9月～17年11月
ソロモン群島 ショートランド島水上基地



- ② 横須賀航空隊
航空技術廠飛行実験部所属
昭和17年～18年

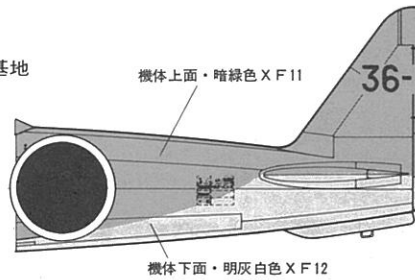


- ③ 第5航空隊所属
昭和17年8月～17年11月
アリュージョン列島・キスカ島水上基地



★塗装★ 初期塗装

一説では上面・藤色、下面・暗い灰色の塗装機体があったとの事です。

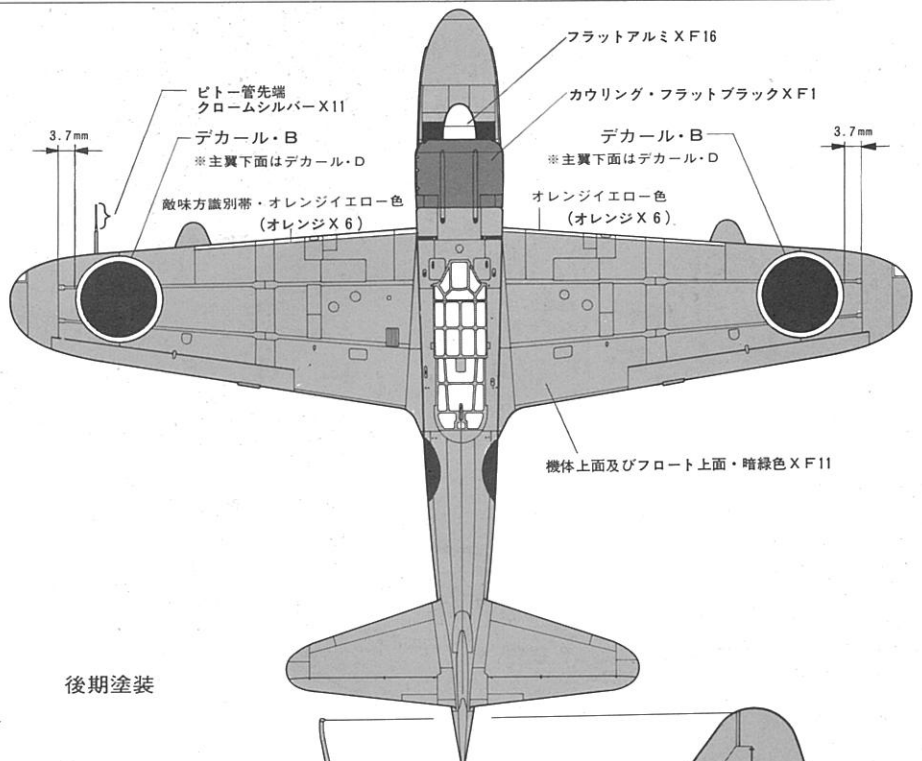


他機体全面は明灰白色塗装。プロペラ、プロペラブレード裏面はブレード先端に2本の赤線。国及び左右主翼上下面に記入。この年末頃まで行なわれました。

方戦線のジャングル地帯を飛行込み敵側に目立たない様、昭和装の胴体・主翼・フロート(浮舟)方識別のため主翼前縁、翼中央エロー色の帯を塗装、国籍マー面のものは白色のフチ取りを前にも応急的に機体上面を暗緑場合は敵味方識別帯のオレンジ。(塗装例④⑤)

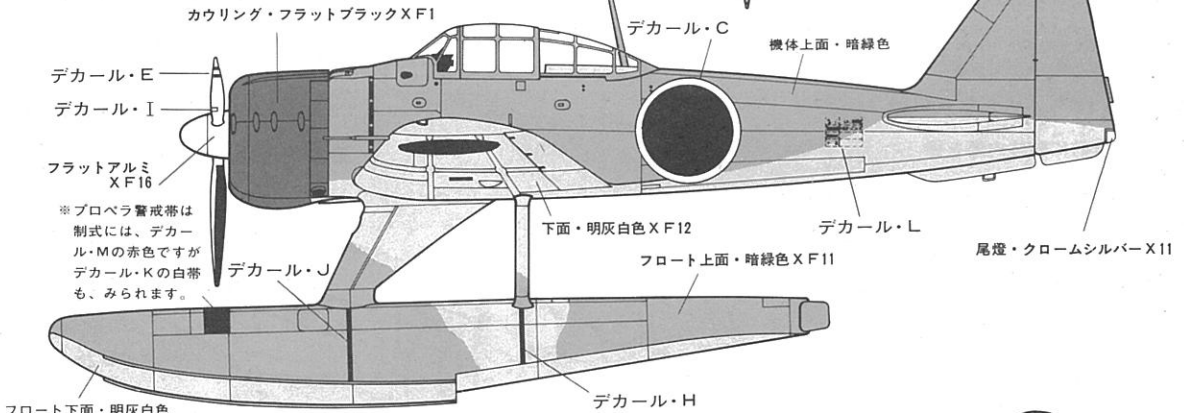
島方面で使用された機体で上面であったと言われています。

説では米軍のジंकクロメートとも言われています。風防内部が、後期塗装では暗緑色が塗ら台車取付位置とプロペラ警戒帯の色は組立説明図をその他はカ

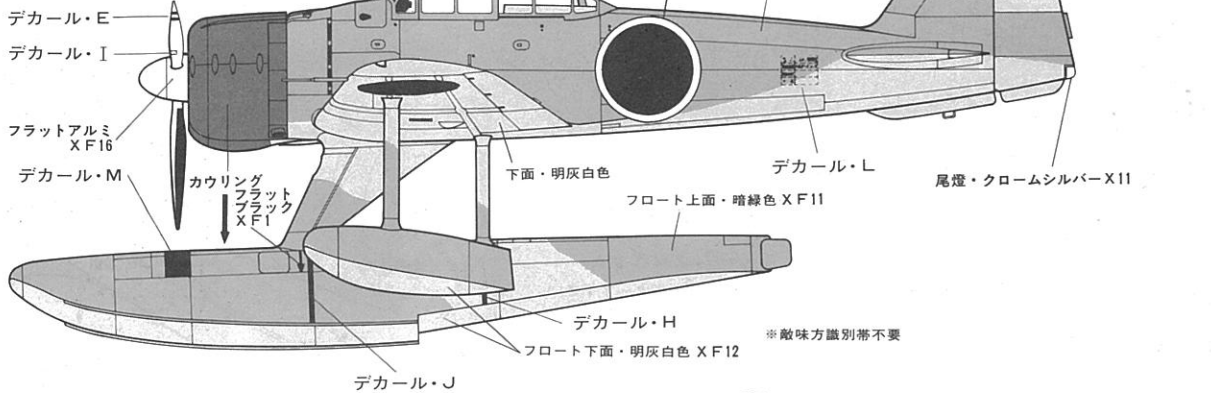


後期塗装

★上面暗緑色の基本塗装パターン★



④ 第452航空隊所属
昭和18年2月、(水上機母艦君川丸搭載時)
昭和17年11月~20年1月
北千島・占守島水上基地



⑤ 第36航空隊
昭和17年6月~17年11月
ボルネオ島・バリクパバン水上基地

★塗装★
後期塗装
敵味方識別帯不要

⑥ 第934航空隊
昭和17年11月~19年10月
アボン水上基地

★塗装★
後期塗装
敵味方識別帯必要

